

加選手の前で審判長から特別の好評をいただき、ある新聞に記載されたことを覚えている。次の年は三位であった。

一、昭和四十年全国高校新春ラグビー選手権大会長崎県大会に優勝。野球部がない時代で、まさに甲子園出場決定のような喜びに沸いた。ところが設立されて間もないために、出場経費をどうするかという問題が出て、体育後援会費という会費が初めて徴集された。またブラスバンドが生まれたのもこの時である。いよいよ選手出発の日、大村駅前での盛大な壮行会は、黒山の見送人と多くの幟の中に、いつまでも大村工業ラグビー部万才の声がこだましていた。

## 野球部と共に七年

谷川 成昭

41・453・3

土木科

現在 佐世保工業高校教諭

佐世保市日宇町五二二教職員住宅

昭和四十六年四月、野球部は同好会としてその活動を正式に認められました。

千人をこす男子生徒を有する学校であってみれば、野球好きな生徒が数多くいたであろうことは想像に難くありません。昭和三十七年の学校創立以後、この日までの、名も知らぬ野球愛好の生徒諸君の地道な日々の活動が、やっと花開く時を迎えたのです。



昭和47年6月 バッティングゲージ完成を祝って

私が大村工業に赴任したのは、昭和四十一年四月のことですからそれからでも五年の歳月を要したことになります。当時より幾人も生徒達が、思い思いの服装で粗末なグラブを使い、校庭の片隅でボール投げをしたり、休みの日などには、校外の空地でバッティングや守備練習に取り組んでいる姿をよく見かけたものです。活動の保証も、公式戦に出場する目標もないのです。彼等の他のクラブへの羨望の思いと満たされぬ心情を察する時、同じように野球が好きな人間としては、何とか部創立に尽力してやりたいと思う気持ちが年ごとに強くなってゆき、気づいた時には、自分自身の指導力に大きな不安を抱きながらも、もう後戻りできない程の情熱にかわっていました。生徒達は毎年生徒会に対して、部創設を認めてくれるよう働きかけていました。硬い反応も少しずつではありますがかわってゆきました。私も藤田和夫先生の協力を仰ぎながら、多くの先生方の理解と力添えを求め続けました。

新しいものを生み出すということは、こんなにも大変なことなのかと思う程ではありましたが、幾多のハードルを越えてやつとこの日までこぎつけることができました。同好会とはいえ、対抗試合も認めるというこの決定の瞬間の、武者ぶるいにも似た心のたかぶりを、今でも忘れることができません。生徒達の夢が現実のものになったんだということで、私の心は安堵感と満足感で一杯でした。それはこれから先に待っているであろう多くの苦勞を考えてみても、なお余りある嬉びでした。

きちんと野球のできるグラウンドは勿論のこと、バッティングゲージや防護ネット等の設備も皆無であり、野球用具も満足にないスタートではありましたが、生徒ともども放課後になるのを待ちきれぬ

思いで、グラウンドへ飛びだしたものです。バッティング投手をし、それからノックと続き、毎日くたくたではあったのですが、精神的に充実しきった、楽しくて仕方のない日々の連続でした。

最初の公式戦はその年の第五十三回夏の甲子園予選でした。ユニホームもなく先生方のソフト用ユニホームを借りての出場でした。寸法が合わずダブダブ姿の選手が何人もいましたが、気にする者もおらず、その張り切りようは大変なものでした。結果は一年生投手、糸瀬のコントロールままならず、一対九の七回コールド負けで、残念ながら緒戦を飾ることはできませんでした。粒崎繁主将以下三年生部員は、最初で最後のこの一戦をもつて短い選手生活を終え、後輩達に思いを託して去ってゆきましたが、彼等の残した足跡は、まさにいつの日か甲子園に行く道を開く第一歩となったわけです。

その後、「和の野球」「考える野球」を二つの基本的な柱として本格的チーム作り、伝統作りを始めたわけですが、目の前に大きな障害が立ちちはだかっていました。それは、グラウンド、予算、練習時間の三つです。

デコボコの放虎原ラグビー場での守備練習はイレギュラーバウンドがひどく、そのため選手達は打球を恐がり、練習になるどころかノックすればする程、悪影響がでる始末でした。そこで捕手の使うメン、プロテクター、レガースを着用させ、打球を正面でとらせるようにしたものでした。しかしランナーをおいての実戦的守備練習ができないことは大きなハンディでしたし、打撃練習での生きた打球を処理できないということは、もったいないことでもあり、時間的にも非常なムダだったわけです。

そこで市の体育課に無理にお願いして、週に一度でも、十日に一



昭和49年 春休み、合宿風景

度でもと市営球場をお借りし、集中的に守備練習をやって、日頃の不足を少しでも補うようにしたのですが、球場までの行き帰りに、一日の練習時間の大半を必要とするであって、グラウンド欲しさはつのるばかりでした。それに練習試合はよそのグラウンドへ出かける他はなく、計画も相手のスケジュール次第で中々思うようにはいかぬことが多く、どうしても実戦的な練習が不足がちでした。だから、たまにあいている相手をみつけたら、少々遠くても朝は五時・六時に出発し、夜は八時九時に帰ってくるというような無理を承知で出向いたものでした。

予算、用具の面での不自由さも、覚悟の上とはいえかなりのものでした。なにしろボール一個約四百円する時代に、部費三千円で出発です。使えるボールは十個たらず、部員は対一でキャチボールさえできない状態でした。また当時はアルミバットを使っていなかったため、やっとの思いで購入した木バットが、たった一振りで折れることもあり、そんな時は泣くに泣けない思いでした。年々予算も少しずつ増えはしたのですが焼石に水という程度のものでした。

そんな時、松原スポーツ店からは随分協力をしていただいたものです。支払いは何年かかってもしよいという条件で、最低限必要な用具だけは納品してもらい、急場をしのぐこと度々でありました。また資金不足を補うためバリカンを購入し、お互いに散髪し合い、床屋代に見合うお金を部費として集め、スポーツ店への払いの一部や遠征旅費等にあてる工夫をしたものです。

最後は練習時間です。汽車通生徒が多い関係で、クラブ活動は汽車の時間に合わせて六時までとなっていました。夏期の六時はまだまだ十分の明るさです。創設期のチームであってみれば、やりたい

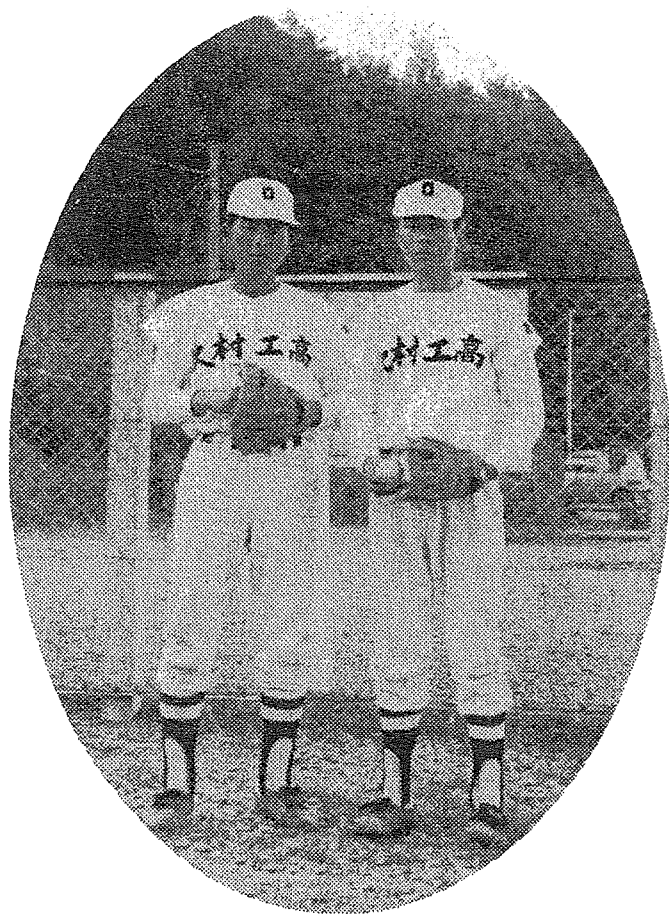
ことは山ほどあります。もったいなくて仕方ありませんでした。すべての条件が満たされたチームなど、そうたくさんあるものではないことは十分承知しています。ここにスタートした時の悪条件を列記したのは、不平不満、泣き事、弁解等のためでは決してありません。逆にこれらの悪条件の一つ一つが、生徒達をたくましく育てることになったことを述べたかったからなのです。野球以外の学校生活において、後指をさされることのないよう日々努力することこそが、チーム力向上の基盤であり、一番の近道であるという私の指導方針を生徒は十分理解しよく努力してくれました。一人一人が野球部作りの先兵たる気迫にあふれていたのです。零からの出発であつてみれば、意気天をつくという表現も決して大袈裟ではありませんでした。

私も悪条件なればこそ、尽きることのない闘志が湧いてきて、体当たりで取り組みました。グラウンドがなくても、ボール、バット等の物に不自由しても、皆で力を合わせ、高い理想に向かつてたゆまぬ努力を続けければ、必ず道は開けるといふ、生きた教育をしてみたい一念でした。今振り返つてみて、もしあの時ある程度整った条件でチーム作りをまかされてきたとすれば、恐らくあんなにまで野球馬鹿にはなりきれなかったのではないかと思います。完全燃焼の毎日でした。

生徒達は逆境の中で、日に日に実力をつけてゆきました。それは技術的な進歩に裏づけられたものというより、精神的なたくましさで強くなつていったという方があたつていたと思われれます。その証拠に対戦相手をして「技術の上でも体力の上でも負けるはずがないと思うのだが、試合が終わつてみると不思議と敗けていた」といわ

せる試合が随分増えてきました。

部創立から三、四年が過ぎてゆきました。中地区に大村工業高校がありといわれる日が真近に迫つていゝ確実な手ごたえを感じることができるようになってきました。多くの人達の声援、御協力のお蔭で、野球部を取り巻く条件も年ごとによくなつてゆきました。この中には、自分達が不自由した思いを後輩達には少しでも軽くしてやろうということで、野球部卒業生たちが乏しい給料の中から出しあつて送つてくれた、心あたたまる贈り物の数々も勿論ふくまれてお



昭和47年4月  
初の地区代表

山崎——池田  
のバッテリー

ります。

大村工業高校野球部誕生期の歴史はこうして終わり、成長期、さらに黄金時代を築くための新たな努力の日々が始まりました。

ここで部創設以後の思い出深い試合や出来事を年譜式にまとめてみようと思います。これによってこれからの選手諸君に、野球部のたどってきた歴史、先輩の努力の一端を知ってもらえればさいわいです。

### ☆ 公式戦初勝利

昭和四十六年秋、九州大会地区予選において大村高校と対戦し、七対〇で完勝。戸崎―池田のバッテリーでした。

### ☆ 初の地区代表権獲得

昭和四十七年春、九州大会地区予選の三位決定戦において、鎮西高校と対戦し、十一対一とコールド勝ち、四番大久保がレフトスタンドにライナーのホームランを放つ。県大会では長崎商業に完敗。相手バッテリーの力強さに、県有力校との力量差を痛感。

### ☆ 夏の甲子園予選二回目出場

優勝候補の一つ、長崎北高と一回戦で対戦。好投手の呼び声高い福島投手を苦しめるも延長十四回、二対三で惜敗。監督の経験不足でサヨナラ勝ちの絶好のチャンス、一死満塁の場面でスクイズをためらい、選手達に辛い涙を流させてしまいました。

### ☆ 夏の甲子園予選三回目出場

夏の大会の初勝利は対佐世保実業戦でした。延長十回二対一で苦しい試合を耐え抜きました。二回戦はシード校の長崎商でした。山崎―能木のバッテリーよく頑張ったのですが延長十回、二対三で悔しいサヨナラ負け。この時の四番バッター宇都は、一六〇センチと小柄な左利きの右翼手でした。きびきびした動きとシャープなバットティングは大会関係者の高い評価を受けたものです。

### ☆ 招待野球

昭和四十九年五月五日、高校野球界の名門、大阪の浪商を大村に招待。身の程知らずという声もありましたが、選手達の励みになればと敢えて強行。その準備たるや大変なものでしたが、大村球場始まって以来という超満員の観客を集めて対戦することができました。大村工対浪商は一对七。諫早対浪商は〇対七という結果でさすがという実力ぶりでした。尚この試合で一年生投手隅田が好リリーフを披露、将来への大きな期待を持たせてくれました。

### ☆ 準決勝進出

昭和四十九年秋、九州大会地区予選で初優勝をかざり県大会に出場。鹿町工業を五対四で破り、初の準決勝進出を決めました。準決勝は長崎東と対戦。一点リードされて迎えた九回裏、二死一、三塁の好機に、代打三根は初球ヒットエンドランを見事に決めるセンチ前ヒットを放ち、三塁ランナー悠悠生還、同点に追いついたかにみえたのですが、本塁ベースを踏んでいないというアピールがあり、無情にも審判の手が上がりゲームセット。我々はただ茫然と立ちつくむだけでした。残念で残念で、今でもその時の新聞記事を読みか



昭和50年 夏の県大会

えすたびに苦い思いが湧いてきます。

二回目の準決勝進出は次の年、昭和五十年春の大会でした。中地区の宿敵長崎日大との対戦になりました。小さな大投手と評判の隅田は三連投の疲れもみせず、持ち前の巧い配球と、ファイト満々の女房役藤田捕手の好リードもあって、好投するも打戦の援護、今一步。一対三で敗れ、秋に続いてまたも決勝進出ならずでした。

昭和五十年のNHK杯県大会でも準決勝進出があったのですがこれまた強豪佐世保工業に延長十回二対三と惜敗。

#### ☆ ユニホーム新調

昭和五十三年春、野球部員の父兄による「放虎会」発足。ベスト四、二回連続進出のごほうびもかねて、ユニホームを寄贈してもらいました。洗練されたチームになって欲しいという気持ちをこめて白一色に統一しました。

#### ☆ 大学進学

昭和五十一年四月、大村工業野球部員として初めて二人の生徒が野球を続ける目的で大学へ進みました。キャプテンでもあり遊撃手として活躍した松田、外野も一塁も立派にこなし、バッティングに非凡な才能を持っていた樫本の二人です。共に、九州産大に合格、野球部に籍を置くことになったのですが、私としては彼等の力が大学野球でどの程度通用するのかとても不安でした。しかし二人とも厳しい競争にも見事勝ち抜き、神宮の大学選手権大会を初め、数々の試合で活躍してくれました。

## ☆ 決勝進出

昭和五十一年春、九州大会県予選準々決勝、対瓊浦戦で延長十八回、二対二と互いに譲らず、引き分け再試合という珍しい記録を残しました。延長戦では常に押しまくりましたが、再三、再四のピンチを、隅田投手のコントロールの良さに全幅の信頼を寄せ、満塁策、満塁策の連続で凌ぎました。特に圧巻は一死満塁でレフトフライ。松本これを補球後、タッチアップの三塁ランナーを殺すべく懸命のバックホーム。球はやや左にそれたのですが、二年生捕手田中は、猛然と本塁にすべりこんでくる走者に、頭から飛びこんでタッチ。間一髪アウトにしました。この試合ばかりは、私も選手達のためくましさに胸を打たれ、深い感動に酔いしれました。翌日の再試合も接戦になりましたが、六対五と下し、準決勝でも末田、隅田の継投が的中し、長崎日大を三対二でやぶり、念願の決勝進出を果たしました。決勝は全国でも屈指の投手として脚光を浴びていた酒井投手を擁する海星です。部創立当時は、練習試合の申し込みさえ出来ない程、雲の上の存在に感じたチームと決勝で相まみえるというので、私も選手も闘志をたぎらせたのですが、一日休みのあった相手にくらべ、三連戦の疲れからか、末田、隅田両投手ともいつもの球威がみられず、残念ながら一対六で敗れました。しかし九州大会で優勝し、また夏の甲子園でベスト四入りを果たした海星の実力を思うとき、この時のチームのレベルはかなりのものであったと思います。この決勝進出のお蔭で、ラグビー場に隣接した空地进行、内野グラウンドとして使えるようにと整地計画が浮かび上がり、ただちに実施に移されました。完成は昭和五十一年の初春のことでした。



投手板埋め込みでお酒をあげる  
昭和52年2月 中央が筆者

## ☆ 夏の大会初のシード校

春の大会の準優勝が評価され、夏の大会ではシードされることになりました。海星、佐世保工・諫早と肩を並べてのシードでした。大会展望の新聞紙上において、「投打にバランスがとれ、粘りある試合運びは県内随一」と評されたことは、これまでの指導が結実し、チームの特徴を認められたようで、これまでの努力が一気に報われた思いでした。試合は三回戦で長崎工業と対戦、セカンド後方のフ



昭和52年 2 月  
出場停止処分中、グラウンド整備に全員が力をあわせる

ライでタッチアップされるという凡プレー、珍プレーがでて、結局一対三で苦杯を喫しました。

#### ☆ 不祥事

昭和五十一年秋、地区予選を勝ち抜き県大会を目前にひかえた十月も中頃、単純な動機ではありましたが、野球部員の関係した暴力事件が起こり、昭和五十二年三月三十一日までの対外試合禁止処分を受けることになりました。私の指導力のなさで大村工業高校の名に傷をつけると共に、選手には勿論のこと、多くの人達に恥ずかしい思いやら辛い思いなどいろいろな形で迷惑をかけてしまい、誠に申し訳のないことでした。それでも選手達はこの試練によく耐えてくれ、三月の解禁まで、寒くて辛い日々をグラウンド作りに黙々と励んでくれ、私の精神的負担を軽くしてくれました。

#### ☆ 底辺を支えてくれた部員達

思い出深い試合やエピソードにたまたまかかわった幾人かの名前が登場しましたが、野球部の屋台骨を支えたのは、多くの試合で全力を出しきってプレーをしてくれた選手達は勿論のことですが、試合に出場する機会さえ与えられなかったにもかかわらず、最後まで弱音も吐かずその責務を果たしてくれた、数限りない部員たちであったことを、強調させてもらいたいと思います。彼等の日頃の努力にはただ頭の下がる思いでしたし、賞讃するに筆をもって尽すことなどとてもできるものではありません。今はそれぞれの仕事場で同僚の人達に愛され、厚い信頼を得てレギュラー、すなわちその職場にとって不可欠の人材として活躍してくれているものと確信してお

ります。

## ☆ 終わりに

佐世保工業高校で再び野球にたずさわることになり、大橋、佐世保、諫早の各球場を始め、いろいろな学校のグラウンドに出向くようになって、なおのこと昔のことがなつかしく思いだされてなりません。一試合、一試合の展開や一人一人の部員の顔が浮かんできます。多くの人達の暖かい支援を受けて七年もの間、好きな野球と取り組んでこれたことの幸せさが今さらながら痛感されてなりません。未熟な私に手をさしのべてくださいました皆様方に、この紙面をおかりして心からお礼を申しあげるとともに創立二十周年という記念すべき年を迎え、大村工業高校、並びに卒業生各位、在校生諸君の、今後の益々の御発展、御活躍をお祈りし終わりといたします。

## 待望のプールが完成

友 永 省 吾

38・451・3

英語

現在 長崎日大高校教諭

大村市小路口本町四二一

学校が成人式を迎えることになり、お祝いを申し上げます。

所在地の放虎原は、小学校の頃遠足で通る時には、麦や甘藷の肥沃な畠地でありましたが、私が出征した間に東洋一の航空廠ができ復員した時には廃墟となっていました。そこに日本の高度成長の波に乗って、中堅技術者の養成校として生まれたのが本校であり、大村市で第三番めにできた公立高校として、市民から多大の期待を寄せられました。私は創立第二年目から英語科教諭として奉職しましたが、当時の生徒は学業、生活態度ともに良好で、市民から好評を受けておりました。以後十三年間勤務しましたので、この間のことで印象に残っていることを書きます。

人間生活の中で最も大切なことは人命の尊重であります。一期毎年自他の命が失われた期間がありました。バイク熱が最大の原因でした。正しく乗るよう全校一致して指導してもなおこんな状況でした。一家の中心である方や、一家で最も大切にされている高齢の方が犠牲になられた時、お悔みに行き、生活指導担当者として指導が及ばなかったことを謝る役目ほどつらいことはありませんでした。しかし保護者や本人のつらさはもっと深刻でした。幸い本人がよくそのつらさを克服して、今ではそれぞれの職務に精励しておられると聞いております。本人の気力やHR先生の激励や、保護者のご指導の賜物と感謝しています。

自殺がありました。列車通学生で自宅でのことでした。警察では「原因がわからぬのは気色が悪い。校内に原因がないならば、列車の中での上下級生間のトラブルなどなかったか」と問われ、再調査をしました。原因はわかりませんでした。新入生の場合など、上